〈研究ノート〉

オックスフォード大学と教育研究の高度化：

なぜオックスフォード大は世界一なのか？[1]

若　本　夏　美

Abstract

This research note explores the puzzle why the Oxford University has continued to have a high reputation as the best university in the world. The author was provided a chance to stay at the Oxford University for one year from late March 2018. The research note is based on such a personal experience of himself as a Visiting Research Fellow at the Department of Education. This note tries to solve the puzzle by focusing on a variety of open seminars offered by all the departments and colleges, the powerful functions of the Bodleian Libraries, and the rich cultural background of the Oxford city. Especially, the author explains the benefits of open seminars based on his rich experience of attending various kinds of seminars and workshops. At the same time, this note points out the specific academic calendar of the Oxford University, in which each of the three semesters consists of only eight weeks. Finally, this note offers suggestions to colleges and universities in Japan such as the opportunities of interactions among different departments and the flexibility of session settings. This note also emphasizes the importance of the relationship between teachers and students to promote higher achievements in research.

1．はじめに：オックスフォード大の評価（世界ランキング）

イギリス・オックスフォード大学は38のカレッジから構成されるイギリス屈指の総合大学である。オックスフォード大学という大学がありそうだが、

ロンドンの北西約60マイル（90キロメートル）に位置する大学を訪れてみると、大小多くのカレッジが点在しているだけでオックスフォード大学という大学自体がないことに気づく。各カレッジの共通施設である図書館（Bodleian Libraries）や卒業式などの式典を行うシェルドニアンシアター（Sheldonian Theater）などはあるものの各カレッジが独自の敷地と建物を持っている。私は2018年３月下旬より2019年３月末までの１年間、オックスフォード大学教育学部（Department of Education）に籍を置き、客員研究員（Visiting Research Fellow）として研究に専念する機会を同志社女子大学より得た（在外研究 sabbatical）。本稿は実際にオックスフォードに在住し経験したことをもとに、研究者の立場から高等教育の在り方について論考するものである。

世界の大学ランキングを毎年調査・公表している *THE*（Times Higher Education）によると2019年度版世界大学ランキングにおいてもオックスフォード大学は依然としてトップの座を維持している（Bothwell, 2018；表１参照）。

***THE* World University Rankings 2019: top 10**

2019 rank	2018 rank	University	Country
1	1	University of Oxford	United Kingdom
2	2	University of Cambridge	United Kingdom
3	=3	Stanford University	United States
4	5	Massachusetts Institute of Technology	United States
5	=3	California Institute of Technology	United States
6	6	Harvard University	United States
7	7	Princeton University	United States
8	12	Yale University	United States
9	8	Imperial College London	United Kingdom
10	9	University of Chicago	United States

図１　世界大学ランキング（Bothwell, 2018）

世界に数ある大学の中で、オックスフォード大学はなぜ最高峰の評価を継続して得ることができているのだろうか。これは素朴な疑問であるが、日本の、ひいては同志社女子大学の更なる発展には重要な問いになるであろう。方法論として統計データを精査したり数々の文献を比較検討することによってもこの問いに関する解答を得ることができるかもしれないが、本研究ノートでは、実際に１年間オックスフォード大学の数々のセミナーに参加し、オックスフォード大学生（主として大学院生）や教職員の姿を目の当たりにした経験をもとに、オックスフォードの「秘密」を解き明かしたい。本研究ノートにおける研究課題（Research Questions）は次の通りである。

１．１　Research Questions

１．オックスフォード大学が世界的に高い評価を受ける要因は何か
２．日本の大学がオックスフォード大学から学ぶ事のできる点は何か
３．オックスフォード大学の問題点は何か

２．議論

オックスフォードで学部生はカレッジに、そして大学院生は学部とカレッジの両方に所属するが、私は客員研究員という立場であったため、教育学部のみに所属し、特定のカレッジには所属しなかった。折に触れてカレッジ・ディナーやランチに招待されたり、カレッジ内の様子を垣間見る機会はあったものの、カレッジ内の寮に居住した印象とは異なる。あくまでも研究者としての立場から議論をすすめる。

２．１　セミナー

まずオックスフォード大学の特記すべき点は数多くの公開セミナー（無料）がカレッジ・学部から提供されているところにある。例えば、本原稿改訂中の2019年５月１日には計29件のセミナーが開催されている。オックスフォー

ド大学は３学期制を採っており（Michaelmas［autumn］、Hilary［spring］、and Trinity［summer］）、多くの授業は最初の２学期に集中している。３学期目のトリニティーは開講される授業もオックスフォードに居住する大学生や院生も少なく、セミナーの数も実は少ない。その少ない部類に入る学期ですら30近くのセミナーが開講されているのであるから、２学期中には更に多くのセミナーが提供されることになる。通常セミナーは Oxford Talks（https://talks.ox.ac.uk/）のサイトに掲載され（図２）、そのリストをもとに参加することも可能である。

もちろん、学期外にも継続的に年間を通してセミナーは開講されている。各種セミナーは午前中から開講されている（場合によっては朝８時半スタートのセミナーも存在する）。一方で、夜のセミナーが無いのも特徴で最後のスロットは大方午後５時から６時半に終了する。これは授業や大学の事務室についても同様で午後６時半にはオックスフォード大学の全ての業務が終了

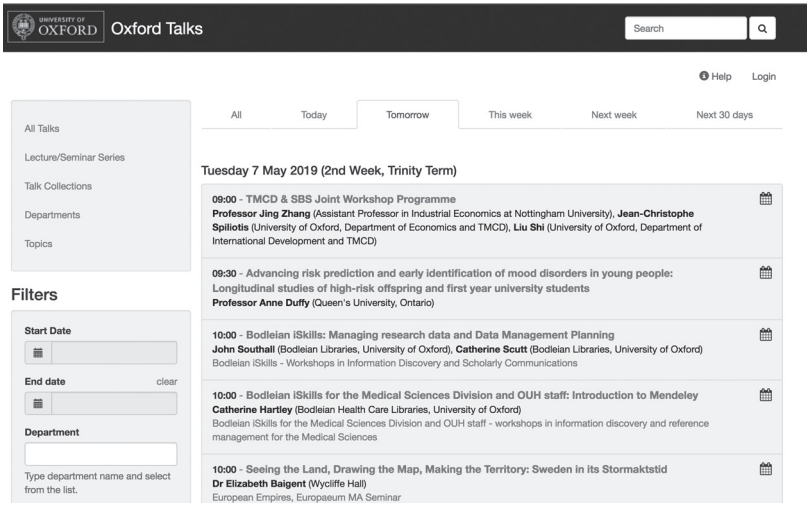

図２　セミナーの一覧（Oxford Talks）

する。中央図書館の機能がある Bodelien Libary であっても午後７時までである。

さて、そのセミナーであるが、私は滞在中、大まかには以下６種類のセミナー・ワークショップに参加した：(a) 教育学部主催のセミナー、(b) 応用言語学グループ (Applied Linguistics Seminar)、(c) 実験心理学グループ (Experimental Psychology Seminar)、(d) 日産研究所日本センター主催のセミナー (Nissan Institute of Japanese Studies)、(e) その他の学部やカレッジ主催のセミナー、(f) IT サービス提供の各種ワークショップ。

セミナーは90分が原則で通常60分間のレクチャーと30分程度の質疑応答から成る。オックスフォード大学で意外だったのはそれほど多くの質問が出ないことである。北米でこのようなセミナーが開催されると数え切れないくらいの質問の手が上がるのが通常であるが（もちろんオックスフォード大学でもそのようなセミナーもあったが)、多くの場合、少し間を置いてからポツポツと手が上がる程度であり、質問を打ち切って時間切れということはほとんどなかった。どちらかというと日本における講演会の様子とよく似ている。これは参加している私にとっても気分的に随分と楽で却って質問しやすい状況であった。私達は、“Don’t be shy. Ask any questions.” と、主としてアメリカ人英語教師から常に叱られてきたが、これはアメリカ人特有の質疑応答スタイルだったのかもしれないと考えるようになった。オックスフォード大学のレクチャーでは参加者が話をよく聞き、よく考えて質問していたように思う。何かに追い立てられるようではなく、ひとりひとりの中に豊かな時間が流れていたように思う。同じ英語圏でありながら、北米とは異なったスタイルを発見すると同時に、同じ島国というとステレオタイプのように聞こえるかもしれないが、オックスフォード大学のセミナーは日本人の気質に適したスタイルであったように思う。質問してもしなくてもどちらでもいい、質問しないことに対する罪悪感も無い。別の言い方をすると沈黙に対する許容度が高いように思えた。その分、各自が持ち帰る部分（Take-home

message）が多かったのかもしれない。この豊かな環境に甘えて、私は1年間の滞在中に計101回のセミナー・ワークショップ（後述のITサービスのワークショップを含む）に参加させて頂いた。自分の専門分野についての最先端の話を聞くだけでなく、通常は聞く機会のない自然科学の分野のセミナーにも随分と参加させて頂いた（例えば、「氷山の大きさはどうやって測るの？」や「エコシステムとしての地球」）。このような分野違いのセミナーから、プレゼンテーションファイルの色使いの違いといった細かなことからプレゼンテーションへの異なったアプローチのような大きな視点まで多様なヒントを得たように思う。

ひとつひとつのカレッジは独立しているが、このセミナーによってそこで得られた「知」を共有するシステムとしてのセミナーがまず間違いなくオックスフォード大学を世界一に押し上げている理由の一つであると考えられる。

知は共有することによって、更に発展する道を進むことができる。また、この多様で高度な知の共有は分野が異なっていても知的刺激を与えることができる。オックスフォード大学はリベラルアーツを看板に掲げることはないにせよ、結果的に大学全体としてリベラルアーツを体現している。その構成員である学生・大学院生・教員・研究者全てがその知の提供者であり、受信者である。この双方向性の性格をもつセミナーにより、すべての構成員が互いに知的なヒントを得ることとなる。学生は更に学び続けようとするモチベーションを高め、研究者はリサーチ発展の足がかりを得ることとなる。もし、オックスフォード大学にこのセミナーがなければ、各カレッジや学部がたこつぼのように独自に学問研究するだけで、同じ大学に共存することの意味は見いだせなかっただろう。各専門分野の学会はもちろん大学外に存在するが、学内にこのようなセミナーという仕掛けを持っているところにこの大学の強みを見いだせる。だからこそ、イギリス国内外を問わず多くの大学の研究者がこぞってこのオックスフォード大学のセミナーでの発表に意欲を燃やすのだと思う。

セミナーの後は多くの場合、ワインによるレセプションで締めくくられる。ここはインフォーマルな場であるがネットワークを作るのに最適な所でもある。特にはじまりの乾杯も終わりの挨拶もなく、三々五々、時間のある者、話したいことがあるメンバーのみが集まってくる。ここでは全体で質問できなかったことも個人的に聞くことが出来る格好の場でもある。ワインを飲みながら参加者と歓談することの効果は少なくないと思う[2]。

２．２　IT サービス・ランゲージセンター

オックスフォード大学には共同施設として IT サービスやランゲージセンターが設置されている。

ランゲージセンター（https://www.lang.ox.ac.uk/）は英語のみならず多様な言語の運用能力を高めるプログラムを提供している（日本語も含まれている）が、その中心はオックスフォード大学で学ぶ英語を母語としない学生・大学院生・研究者のためのプログラム提供にある。大学の授業のような６週間（土日を除く毎日）の長期にわたるコース（Pre-Sessional English Course、受講料は£3250、約50万円）から週１回ペースのコース（例えば、アカデミックイングリッシュ、English for Academic Visitors and Researchers、受講料は£400、約６万円、学生は半額）がある。私は実際に、2018年６月下旬、１週間の集中講座、アカデミック・ライティング（Short Course：Writing a Thesis or Dissertation、£400、約６万円）コースに参加してみた。人気講座であるらしく、Waiting list に多くの人が名を連ねているので来る気が無いなら即刻やめて待っている人に席をゆずってあげて欲しいと初日に通告された。参加者は20名。私を含め数名を除けば修士課程又は博士課程の大学院生であった。午前中３時間[3]、午後３時間、５日間の授業日程のセッションに全て参加して感じたことは、論文の作成の重要なポイントが効果的に習得出来るようにハンドアウトも授業も巧みに構成されているということであった。課題設定（Research Questions）の方法か

らAbstractの書き方まで、万が一全く英語の論文執筆経験のない大学院生でも実際に自身の論文を書く際にそれほど戸惑わなくてもいいレベルまで必要十分な内容を含んでいる。以前、カナダ・トロント大学に在学した際にいくつかのワークショップに参加した経験がある。20年近く前のことであるので直接の比較はできないかもしれないが、トロント大学のものが単発的なもの（例、参考文献の作成方法）であったのに対し、オックスフォード大学はより系統的で洗練されているように感じた。もちろん有料であり、実際に受講できる参加者の数も限られてはいるが、大学としてこのような論文の書き方についてきちんとした方法論を持っていることの意味は大きいと思う。「スキル」が教えられる内容として言語化されていることにより（declarative knowledge）、知の伝播が可能となるからであり、学生や大学院生が論文執筆方法で困ったらどこに行けばいいか分かるからである。ただこのランゲージセンターも問題が無いわけではなく、私が帰国する直前にはセンターが持っている図書室をIT化に伴い閉鎖するかどうかの議論が行われていた。

一方、大学にとってそのIT（Information Technology）は重要な問題である。ランゲージセンター同様、オックスフォード大学には共同施設ITサービス（IT Services：https://www.it.ox.ac.uk/）が設置されている。実際にITサービスが提供する各種ワークショップの他に、インターネット設定やWebを通して有益なソフトウェアのダウンロードができるようになっている。日本の大学でも多くなってきたが、オックスフォード大学は「シングルサインオン（Single Sign-On）」のシステムを導入しており、一旦自身が与えられたIDとPasswordを設定しておくと、図書検索においてもソフトウェアのダウンロードにおいても別々に再入力する手間が省かれている。

ソフトウェアの提供で有益だと思ったのは、同志社女子大学でも同様に可能となっている量的統計パッケージSPSSである。一方、同志社女子大学では提供されていないが、オックスフォード大学で提供されているものに質的データ分析ソフトNvivoがある。Nvivoはインタビューやオープンエン

ドの質問紙の分析に威力を発揮する。少し意外であったのは、Structural Equation Modeling（共分散構造分析）に利用するソフトウェア Amos が同志社女子大学では提供されているのにオックスフォード大学では無料ダウンロードできない点である。これらはオックスフォード大学のシングルサインオンの資格を持っているものであれば、１回に限りダウンロードが許可され、使用は１年間の期限付きである。私は、同志社女子大学で SPSS と Amos（市販価格、約８万円）をダウンロードして、オックスフォード大学で Nvivo（市販価格、約12万円）をダウンロードさせて頂いたので１年間を通し、研究上困ることは無かった。

一方、IT サービスではその他、各種のワークショップが開催され、オックスフォード大学構成員の IT スキルの向上に貢献している。私は到着してすぐの Hilary 学期に前述の Nvivo のワークショップに参加しようとしたが定員（20名）一杯で Waiting List にすら回して貰えなかった。IT サービスが提供するワークショップは人気があるものが多く、専用の検索サイト（WebLearn：https://weblearn.ox.ac.uk/portal/site/:）で自分の参加したいものを探しなるべく早く予約（Booking）をする必要があった。これは前述のセミナーにおいても、Booking の必要なものでかつ人気のあるものは早々に売り切れ（Sold out）となった[4]。さて、この IT サービスのワークショップは、秋に実際に Nvivo のワークショップ初級コース及び上級コース（ともに１日コース、£120、約１万８千円）に参加したが、最初から最後まで全て一日でマスターできるという優れものであった。また、iPad の使い方というアップルストアで行っているようなワークショップもあったが参加してみると目からウロコのアイディアが満載でクラスサイズも大抵15名～20名の少人数で丁寧にわかりやすく教えてくれる。このようなワークショップに参加することにより、自分自身の研究スキルが徐々に効率よくスピードアップしてゆくことを実感した。またワークショップであるので参加者同士で意見交換する場も設けられていて、他の参加者の意見に気づかされること

も多くあった。あるとき、Plagiarism（剽窃）についてのワークショップに参加した際には、オックスフォード大学でも教員が学生が提出するレポートにPlagiarismまがいのものがあることに困惑していることに改めてインターネットの光と影を見た思いであった。この場合にも、強力なソフトウェアであるTurnitin（ターンイットイン：https://help.it.ox.ac.uk/turnitin/index）の使い方を丁寧に伝授してもらい、日本でも導入されればいいのにと思ったものである。しかし、オックスフォード大学が世界一と評価される最大の理由は次に述べる図書館システムが寄与するところが大きいと考えられる。

２．３　図書館

オックスフォード大学図書館は中央図書館の機能があるBodleian Library（Old Bodleian Library, Radcliffe Camera, Weston Library）と各学部・カレッジの図書館の連合体である（総称してBodleian Librariesと呼ばれる）。例えば、Radcliffe Cameraはオックスフォード大学のランドマーク的な建物で絵はがきや大学の紹介パンフレットによく登場する。Old Bodleian Libraryとは地下通路（Gladstone Link）で繋がっておりこの周辺はオックスフォード大学の重要な歴史的資料が眠る貴重な貯蔵庫となっている。またOld Bodleian LibraryのDuke Humfrey's Libraryは映画『ハリーポッター』シリーズでロケに使われたことでも有名である。実際足を踏み入れてみると16世紀に作られた大学の中で最も古いReading Roomであるその歴史と重みを感じることができる。学問的に神聖な場所とも言えるその場に座り研究に思いを馳せるだけで真摯な気持ちになるのは事実である。また大英図書館（The British Library）に次ぐ蔵書数も圧倒的で全てのカレッジ・学部の図書館がオンラインで結ばれ、読みたい本は数日の内に手に入る。博士論文（DPhill）のみは、貴重本扱いされリクエストを出すとWeston Libraryで閲覧が許される。Weston Library

やDuke Humfrey's Libraryは大英図書館と同様、持参したカバンからパソコンやノートなど中身だけを取り出し、用意された透明のカバンに移し替えなければならない[5]。

このような荘厳とも言える雰囲気自体が学問に向かわせる仕掛けとなっているが、このBodleian Librariesが最も優れている点は契約しているデータベースとジャーナルの数にある。SOLO（Search Oxford Libraries Online：http://solo.bodleian.ox.ac.uk）を利用すると最新から過去に至るまでの多彩な論文や本を検索することができる（図３）。

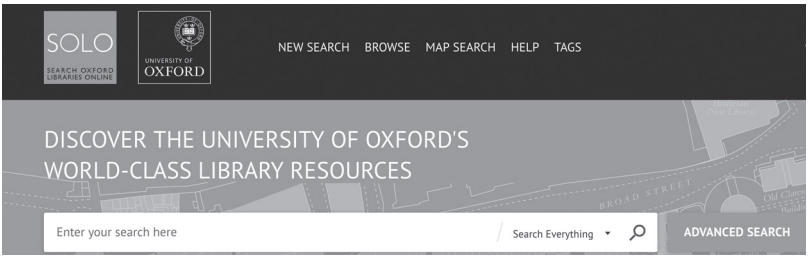

図３　図書検索のサイト

また、多くの大学でも提供されているVPN（Virtual Private Network）がオックスフォード大学でも利用可能になっており、これにより大学外でも図書館の機能を同等に利用する事が可能となる。

ここまではシステムとしては同志社女子大学も遜色の無いものであるが、実際に利用してみるとオックスフォード大学のデータベースの利便性に驚く。同志社女子大学や日本の大学で論文検索をしPDFをダウンロードしようとすると有料であることが多く（その金額が１つの論文で＄30位することが多い）、そこで断念してしまいがちである。しかし、ことオックスフォード大学の検索エンジンに限って言うならば、PDFをダウンロードできなかったことはほとんど無い。ほぼありとあらゆる論文を瞬時にPDFでダウンロー

ドすることができた。これほど研究する意欲を喚起し、新たなアイディアが湧き出ることを促進することはない。１つの論文を探し出し、それを読むことによって次に必要となる論文を探す。オックスフォード大学ではこの過程を妨げるものは何も無い。これほどスムーズに先行研究を読むことができたこともない。まるで世界の図書館が全てオックスフォード大学図書館とバーチャルにつながっているかのような錯覚を覚えた。中には Bodleian Libraries のどこかの端末でないと読むことのできない本（電子化）や論文もあったが、VPN の環境で自宅から自由にアクセス・ダウンロードできるものが大多数であった。関係者によるとオックスフォード大学のデータベースの契約数はヨーロッパ随一であるとのことであったが、北米の有力大学と比較しても群を抜いているのではないかと思う。朝日新聞のデータベース「聞蔵Ⅱ」にもアクセスが可能であり、同志社女子大学ではできない VPN によるアクセスがオックスフォード大学ではできるのが不思議な感じであった。

この経験を通して、私は在外研究でオックスフォード大学を選んだことは正解だと思った。これまで何年も実物を読むことが叶わなかった古い論文も実際に読むことができた。また、ダウンロードする論文の数が増えるに従い、自分のコンピュータの中に自分の研究分野の PDF によるファイルボックスが構築されるのを感じた。

唯一残念であったのは、このアクセスの権利があるのはオックスフォード大学への在外研究中のみであり、客員研究員の身分が終了すると同時にこの豊かな論文のレポジトリーにアクセスできなくなることであった。多くの関係者に相談したが、この点だけはどうしようもないことのようだった。

この研究ノートも出版されたのち、SOLO で私の名前とオックスフォードとキーワードを入れると遠くイギリスのオックスフォード大学でも閲覧可能となることだろう。大学の規模は違うにせよ、どこに予算を投入するかを熟知しているところにオックスフォード大学の奥深さと知見の深遠さを感じる。

２．４　街の文化的土壌、気候の良さそして文化的背景

その他、オックスフォード大学が有利であると感じるのは人口15万人程度ではあるがオックスフォードという街の文化的土壌である。街が大学を中心に形成され、『不思議の国のアリス』の著者であるルイス・キャロル、『指輪物語』や『ホビット』の著者であるトールキン、『ナルニア国物語』の著者であるＣ・Ｓ・ルイスが同時代にオックスフォード大学の教員であったこと[6]など、自然とこのオックスフォードという街自体に文化的な薫りを感じることができるのも有利な点である。ギネスブックに「世界一大きな本屋さん」という記録がある Blackwell Bookshop に行くと彼らの本やその関連グッズが目の届くところに常時置いてある。少し意外であったのはイギリスの Amazon は翌日配達が通例ではなく、数日経っての配達となることが多かった。そのせいか、少なくなってきたとはいえオックスフォードの街には Waterstone などまだ多くの大きな本屋さんがあり実際に手に取って本を選ぶことができる。

食べものは確かに日本ほど美味しくないが、古くから在住している日本人に聞くと EU 統合以来随分その品質も向上したようである。そのため、実際にどこのレストランで食事をしても落胆することはなく日本食が恋しくなることもなかった。それ以上に高品質のエールビールが安価でパブで飲めることは利点であった。学問研究にとってお酒などの嗜好品は重要であるのは言うまでもないことである。

イギリスの気候も学問研究には適したものであると感じることが多かった。もっとも高緯度地域であるため、冬の日照時間は短く、冬至の頃には午後４時前に日没となることも多く、どんよりとした天気とともに何か鬱々とした気分になることも多かった。その分、春や夏が来たことの喜びは大きい。日本の梅雨とは異なり６月は本当に美しい[7]。特に、学問研究に適していると感じたのは気温と湿度である。欧米の映画で男優が肌着を着ずに直接ワイシャツを着ているシーンが多く、不思議に思っていたが、イギリスでは肌着は不

要であることが実感できた。気温は暑すぎず、寒すぎない[8]。ひとことでいうなら汗をかくことが無いのである。しかも、夏の蝉に限らず虫がほぼ皆無で、蚊や小さな飛翔物に悩まされることなく、花粉も飛散しないため研究に集中できる。

帰国してみて、改めて日本はアジアの一国であり近年の温暖化のせいか亜熱帯の様相すらあると感じている。気候ばかりは如何ともしがたいところがあるかもしれないが、イギリスにおいては１年を通してあまり大きな変化が無く研究に集中できるのは事実である。

私は渡英前までイギリスについては常識以上の知識も持たず、イギリス文学・文化についてもこの『アスフォデル』読者よりも多くの知識を持ち合わせていたとはいえない。だからこそ、例えば、同時期に在外研究でオックスフォード大学に来ておられた大東文化大学の河野芳英教授に Beatrix Potter ゆかりの湖水地方、特に Near Sawrey や詩 “Daffodils” で著名な桂冠詩人 William Wordsworth の住んだ Dove Cottage を案内して頂いた際には新鮮な感動と共に、イギリス文学・文化の奥深さに興味を覚えた。それは新聞やテレビについても同様で、到着時に感じたイギリス特有のナンセンスとも思える古いしきたりには辟易としたが[9]、生活に慣れてみると BBC 放送や *Guardian* 紙などの新聞の格調の高さに驚く。BBC は日本同様馬鹿げた番組も制作しているものの、概して真面目で、公正である。新聞もいろいろなものがあるものの、*Guardian* 紙などは毎日よくこれだけの記事を書き続けられるものだと感心するぐらいの内容の幅広さと深さそして量があった。

BBC4チャンネルや *Guardian* 紙を読みながらイギリスの文化性の高さを思った。特段日本が劣っているとは思わないものの、帰国してみて、NHK に特段見るべき番組が無かったり朝日新聞にも読んでみたい記事が見つからないと思ってしまうのも事実である。私の滞在中は（現在もそうであるが）Brexit といわれる EU からのイギリスの離脱問題が連日大きな問題となっていた。BBC も *Guardian* 紙も政権を持つ保守党に忖度することもなく、

労働党に媚びを売るわけでも無く、堂々と両面から論を展開していた。私が大学生の頃愛読した『深代惇郎の青春日記』（深代、1978）に描かれたイギリスの姿がそこにあるように思った。このような論説が日常的に展開される国は強いと思ったのは事実である。日本にもそのようなメディアがあるかもしれないが、グローバルでなければならないと訴えるテレビや新聞自身がグローバルな視点を欠いているのは皮肉である。

２．５　意外なところ

逆に、オックスフォード大学に滞在してみて意外に思った点もいくつもある。街の商店街は平日は基本的に午後７時には閉店する（土日は短縮営業で閉店時間も更に早い）。大学の図書館も多くは午後７時には閉まってしまう。土日も図書館は開いているものの（日曜日は中央図書館のみ）、土曜日に至っては午後４時閉館と極めて早い。大学は３学期（ターム）制で８週間である。第３学期（Trinity Term）が実質サマーターム扱いであまり授業が開講されないことを考えると実質２学期分の16週間で授業は終了である。大学院は１年で修了であるのでこの期間は極めて短いかもしれない。

必然的に特に大学院であれば出願時点でかなりの能力が要求されるであろう。私が滞在中、教育学部応用言語学専攻大学院（修士、MA）の大学院生と話をする機会が度々あったが、彼らの多くは博士課程（DPhill）への進学を望んでいた。MA の定員一杯の25名から進学を許可されるのは数名だという。わずか16週間の授業を受け、修士論文を執筆し、１年が終わる前の１月の時点で博士課程への進学書類を用意しなければならない。日本のように２学期合わせて30回も授業があるのもどうかと思うが、１年限りの16回の授業も短すぎるように思う。短いと言えば、学部においても同様の学期制を採っており、日本と異なり大学は３年制である。３学期すべて授業があると換算しても24×３＝72回、日本の大学の2.4年分に過ぎない[10]。

このように考えてみると、オックスフォードで学ぶものは在学していても

一年の大半はカレッジの寮や図書館などでの自学自習に充てることとなる。それが可能であるところにオックスフォード大学の強みがあるのだろう。またそのための施設と設備が用意されていると言っても過言ではない。

２．６　Research Questions への回答

本研究ノートで設定した Research Question No. 1（オックスフォード大学が世界的に高い評価を受ける要因は何か）への回答はこれまでの議論で明らかになっているだろう。ひと言でまとめるなら、温暖で過ごしやすいイギリスの自然環境の中で、世界中のどのような文献でも探し出すことのできる図書館機能を持ち、各カレッジや学部がたこつぼ化することなくオープンセミナーで切磋琢磨し、日々進化する IT にもソフトウエアやワークショップの提供により対応し、短期集中型で学ぶ一方、学生や大学院生は自律的に学ぶ姿勢を堅持している。その他、街としての文化的に成熟している点、イギリスの BBC や *Guardian* 誌に代表されるような健全なメディアの存在もプラスに働いている、と言えるだろう。

Research Question No. 2（日本の大学がオックスフォード大学から学ぶ事のできる点は何か）への回答についてはいくつか考えられる。例えば、データベースの拡充には大きな予算が必要でありすぐに改善することは難しい。しかし、各大学や各学部、学科がたこつぼ化することなく、セミナーによって刺激し合う点はすぐにでも実行することができるものである。英語英文学会においても2018年度には「スーパーレクチャーシリーズ」として英語英文学科の14名の専任教員全員が30分のミニレクチャーを１年間にわたり開催した。聴衆の数が気になるという意見もあるかもしれないが、オックスフォードのセミナーでさえ、司会者を除けば聴衆が私一人という場合もあった。参加者の数が問題なのではない。このようなセミナーを開催してどのような意味があるのだろうと否定的に考えるのではなく、ひたすら各研究者の最前線たる研究を学内外で公開する場面を多くすることが長期的には大学の社会的・

学問的地位を高めることになる。

また諸刃の剣であるが、授業時数が短い点にも学ぶべきことがあると思う。オックスフォード大学は1200年代の創立以来、時の政権や時代の流れに左右されること無く独自に学問研究の道を切り拓いてきた。日本においては文部科学省の指導が大学においても効き過ぎているきらいがあるが、今こそ、文科省に対していい顔をするのではなく、本来の学問研究の期間として冷静に授業時間の設定のしかたについても考え直す時期だと思う。文部科学省向けには15回の授業時数を設定しておけばいい。その中で、読書週間のような授業週があってもいいと思うし、アクティブウイークのような学んだことを活用するような週を設定して、学生が自由に学内外で活動する週を作ってもいい。オックスフォード大学の授業で寝ている学生はいない。それは必要最小限の授業であるだけにそのようなことを学生がしようという気にさえならない。日本では15回の授業を設定すればそれでいいと思っているのではないだろうか。それで飽き足らない向きは、授業アンケートや他の方法によって授業内容の高度化を教員に促そうとする。しかし、この方法だけで本来の学びが成立するとは限らない。むしろ、15回の授業を柔軟に運用するような方法を教員と職員が共に考え、同志社らしい授業時間数の在り方があってもいいのではないかと思う。

京都は、大学の街と言われるだけあって、オックスフォードと同様この街に大学が存在するだけで利点は計り知れない。オックスフォード大学の優れたところを「少し」導入するだけで大きな変化が産まれるように思う。

Research Question No. 3（オックスフォード大学の問題点は何か）への回答については授業時間数が短すぎるのではないかという点以外は思いつかない。一方、授業時間数が少ないことは教員にとってはそれだけ研究のための自由な時間が保障されていることであり、その高度な研究は教育に還元されてゆくという利点となる。この授業時間数の問題は同志社女子大学としても一度その柔軟な運用方法について検討べきではないかと思う[11]。

３．おわりに

大学の核心部分はもちろん教員と学生の接点にある。オックスフォード大学の先生方は授業時間数が少ないせいもあるのか、学生ひとりひとりとの時間を大切にしているように思えた。逆説的だが授業時間が少なくなると学生が先生と話をしたくなるのかもしれない。教員も同様である。日本のように高校並みに３コマも４コマも１日に詰め込みで授業があると、終わるとすぐに帰ってしまいたくなる気持ちも分かる（教員も）。大学で重要なのは「高度な授業」「高度な研究」であると思うが、そのためには「豊かな時間」が教員にも学生にも流れている必要がある。オックスフォード大学の38あるカレッジには必ずチャペルがあり、どのカレッジも礼拝を大切にしていた。この点は同志社女子大学と共通するところである。チャペルでの礼拝は、信仰の相違や自由はあるにせよ、何かを探求する上で厳粛かつ重要な豊かな時間を醸し出すのに貢献していたと思う。

私は豊かな環境の中で１年間という貴重な時間を過ごす機会を得ることによって、どのようにすればオックスフォード大学のようなしなやかで誰におもねることも無い自由で自主独立の道を歩むことができるのか考え始めるようになった。しかし、鑑みると英語英文学科には既に教員が垣根なく自由に話ができるムードがある。今回退職されるジュリエット・カーペンター先生はいつもその中心におられたように思う。先生の存在が大きかっただけに、そのようなムードをさらに発展させるためにひとりひとりの教員が何ができるか真摯に考えてゆく必要があると思う。これは私の専門とする応用言語学の研究分野に加えて、今後の人生のライフワークになるに価するテーマとして実践しながら考え続けてゆきたいと思う。

あらためて、このような貴重な機会を与えて頂いた同志社女子大学並びに温かいご支援を賜った英語英文学科の諸先生、英語英文学科研究事務室、ならびに英語英文学会事務局に心から感謝申し上げる。

参考文献

Bothwell, E. (September 26, 2018). World University Rankings 2019: results announced. *THE* (*Times Higher Education*).

深代惇郎（1978）.『深代淳郎の青春日記』. 東京：朝日新聞社.

註

1　本研究ノートは2018年度在外研究の成果の一部である。

2　イングランド地方では、ビールでは２パイント（約１リッター）までは飲酒後の運転が許容されていることもあり、車を運転する者が大半である中でも、ワインの提供が可能となっている。日産研究所日本センター主催のセミナーでは時に日本酒が供される場合もあった。

3　オックスフォード大学での昼食休憩は午後１時～２時までであった。

4　2019．３．18にシェルドニアンシアターで開催された、ハーバード大学教授 Steven Pinker の講演会は短時間に売り切れとなったし、2018．６．26に同会場で開催の前アメリカ国務長官 Hillary Clinton の講演会は無料であったものの、整理券は発売「前」に完売となってしまった。

5　盗難防止のためである。

6　パブ『The eagle and child』はこの３名が同時期に一緒によく集っていたことで有名である。

7　私は最初に美しい５月、６月を経験し、その後冬を迎えることになったが、本来は辛いシーズンを堪えて夏を迎える方が喜びは大きかったと思う。在外研究の日程の関係でオックスフォード大学滞在は４月スタートとせざるを得なかった。

8　私の滞在した2018年夏は、何十年ぶりかの雨が少なく高温の異常気象と BBC が連日報じていたが、それでも最高気温はせいぜい32℃程度であった。

9　アパート（フラット）を契約するためには銀行口座を開設する必要があったが、銀行口座を開くためにはフラットに住んでいる証明として電気・ガス、又は水道のそのフラット宛ての請求書が必要とされた。典型的な Catch 22（板ばさみ状態）である。

10　Oxford 大学と Cambridge 大学はイギリスでも特別視されているのか、学部を卒業して２年経過すると大学院修了の学位（MA）が自動的に授与される。一方、イギリスの大学には定年は設定されていないが、Oxbridge のみ67才である。

11　京都大学も15回の授業制度を採用しているが、補講は強制されず、実際には柔軟な運用となっていると思う。非常勤講師の給与は授業回数に応じて支払われるため補講をしなければそれだけ給与が少なくなるシステムになっている。